

顔のない男の子ー弱
男の非モテライフー

【あらすじ】

少年時代の棚橋太一（5）は、目に入るもの
名前を次々に呟いていく叔父の奇癖に心を奪
われ、影響を受けてしまう。

10年後。高校生になった太一（16）は、叔父
の奇癖を見事に受け継いでおり、それが原因
でクラスの女子はもちろん母亜希子（45）か
らも存在しないものとして扱われていた。

そんな太一も恋をしていた。相手はクラスメ
ートのりな（16）。だがりなが心を寄せている
のはイケメン男子の流星（16）で、太一は二
人の青春を影から見つめることしかできない。

やがて事態は一変し、流星が亜希子と交際し
ていたことが発覚する。こうして太一の周囲
で、亜希子、りな、流星による不穏な三角関
係が形成される。

動揺する太一だったが、自身は何一つ介入で
きぬまま、修羅場は「りなと亜希子が流星に
まとめてフラれる」という着地を迎える。

傍観者としての太一の生活はその後も果てし
なく続いていき、気がつけば人生の終幕を迎
えようとしていた。

【登場人物】

佐藤りな (16) 太一と同級生

棚橋亜希子 (35) (45) 太一の母

菊池流星 (16) 太一と同級生

棚橋みゆ (13) 太一の妹

陽向 (15) 太一と同級生

沙織 (16) 太一と同級生

教師

男子

親戚 1、2、3、4

叔父 (40) 太一の叔父

棚橋太一 (5) (16) (80) 高校生

○太一の家・居間（夜）

親戚 1、2、3、4、テレビを見ながら飲み食いしている。

皆、喪服を着ている。

叔父（40）が部屋の隅っこでじっとテーブルを見つめている。

親戚 1、テーブルの上の寿司桶から中トロをとる。

叔父「…中トロ（とつぶやく）」

親戚 2、エンガワを取る。

叔父「エンガワ」

親戚 3、やりいかを取る。

叔父「やりいか」

太一（21）、不思議そうに叔父を見つめている。

親戚 1、中トロをとる。

叔父「中トロ」

親戚 2、サーモンをとる。

叔父「サーモン」

サーモンのシャリに緑のギザギザがへ

ぱりついている。

親戚㉔、緑のギザギザを剥がしてテー
ブルに置く。

叔父「(緑のギザギザを見て) バラン」

太一「(はっとする)」

親戚㉕、眉を潜める。

親戚㉖「(ひそひそ声で) …また始まった」

親戚㉗「(太一へ) 叔父さん、気味悪いでしょ
う」

太一の母亜希子(35)、台所からやって
くる。

亜希子「ごめんなさい。お醤油切らしちゃっ
たので、お寿司に使ってたのを使ってくだ
さい」

親戚㉘「いや、お構いなく」

親戚㉙、寿司に使っていた魚の形をした
醤油さしを取る。

叔父「(魚の醤油さしを見て) ランチャーム」

太一「(はっとする)」

親戚㉚「(亜希子へ) 近づけたらあかんとちゃ

う？　すぐ真似したがるんやろ？」

亜希子「え」

親戚「ほんまや。お友達のどもりが移って
治るまで大変やった、亜希子さん、話して
たやん」

親戚「あんな変な癖を覚えたら……」

亜希子、心配になって太一の肩を掴む。

亜希子「：ほら。あっちで妹と遊んでなさい

（と太一を叔父から遠ざける）」

親戚「、中トロをとろうとするが、コ
ハダに変える。

叔父「中ト：コハダ」

親戚「、マグロをとる。

叔父「マグロ」

太一、遠くから大きな瞳で叔父をじつ
と見つめている。

○太一の家・居間（10年後・朝）

テロップ「10年後」。

- ・ 以下、太一の主観映像で全シーンが進む
- ・ ト書きに「太一」と表記するが、カメラに太一の姿は映らない
- ・ ト書きの指示がない限り、太一の視線（＝カメラ）は動かないものとする

テーブルに座る太一（16）の正面で、妹のみゆ（13）がパンを袋から出して
いる。

みゆ「（キッチンへ）ママ、ジャム」

亜希子の声「ママはジャムじゃありません」

みゆ「朝からそういうのいいから」

亜希子（45）、ジャムの瓶を持ってやってくる。

亜希子「（渡して）今日も部活？」

みゆ「（パンにジャムをぬる）うん」

亜希子「ねえ、みゆ。駅前のデパートでピカソ展やってるの知ってるでしょ。今度の休み、二人で見にいかない？」
みゆ「ピカソとか興味ないし」

亜希子「…そっ。ならママ、お友達といって
こようかな」

みゆ、パンをくわえて立ち上がる。

みゆ「いってきまーす！」

亜希子「いってらっしゃい！」

テーブルの上に開けっ放しになったパ
ンの袋。

亜希子、気づいて、パンの水色の留め
具を手にとる。

亜希子「(ボヤク)ったく、ちゃんとこれど
めとかなきゃダメでしょ」

太一の声「バッグクロージャー」

亜希子「…」

亜希子、一瞬、太一を見る。

亜希子、バッグクロージャー（水色の

留め具）でパンの袋をとめる。

亜希子「…さ。洗濯物しなきゃ」

とそそくさと去っていく。

○電車内

太一が見上げる先に以下の広告。

「ピカソ展開催」

「泣く女」の絵が載っている。

○学校・教室

太一の席の前で、りな(16)、陽向(15)、

沙織(16)、が話している。

陽向「ピカソ展？」

りな「三人でいかない？」

沙織「私パス」

りな「陽向は？」

陽向「うーん。私もバイトあるしなー」

と流星(16)、やってくる。

流星「(沙織へ)よう」

りな、急にもじもじしだす。

沙織「流星。どした？」

流星「世界史の教科書忘れちまって。貸して

くんない？」

沙織「ない。うちのクラス今日世界史ないもん」

流星「マジか（と困る）」

流星、太一を見る。

流星「棚橋！ 悪いんだけど、世界史の教科

書持ってたら貸してくんない？」

太一、視線をおろし、机の引き出しを

ごそごそと漁る。

りなの声「…あ、あ！ 私持ってるけど」

太一、顔をあげる。

りな、慌てて机の中から世界史の教科

書を取り出す。

りな「はい（と渡す）」

流星「お。悪いな」

流星、去っていく。

りな「（顔がほころぶ）」

陽向、沙織「（りなを見てにやにやする）」

りな「（気づいて）何？」

陽向「またまたー」

りな「全然わかんない」

沙織「いやいやいや」

りな「（困って）あ！ そういえばピカソの本

名ってめっちゃ長いって知ってた？」

陽向「話ごまかした」

りな「だから違うって！」

太一の声「パブロ・デイエゴ・ホセ・フラン

シスコ：」

りな、陽向、沙織「：」

太一の声「デ・パウラ・ホアン・ネポムセー

ノ・マリア・デ・ロス：」

りなたち、気まずそうに背を向ける。

×

×

×

太一の声「：トリニダード・ルイス・イ：」

教壇の教師、教科書をしまう。

教師「今日の授業はここまで」

太一の声「(被せて)ピカソ」

教師、出ていく。

流星、教科書を持ってやってくる。

流星、りなの前にくる。

流星「これ、サンキュー(と返す)」

りな「うん（と受け取る）」

流星「そーいや佐藤って美術部だったよな」

りな「…え」

流星「いや、さすが絵がうまいなって（とに

やりと笑う）」

流星、去っていく。

りな「…？」

りな、返された教科書を開く。

りな「あー！」

太一、前のめりになり、教科書をのぞき込む。

落書きでおかしなビジュアルに様変わりしたペリーの肖像画。

りな「（あちゃー）」

○ 電車内

太一の正面に、りな、陽向、沙織が座っている。

陽向「菊池君かー」

沙織「あいつ、中学からモテてたからなあ」

陽向「りな。どこに惚れた？」

りな「…手、かな」

沙織「手？」

りな「手の指がね、ピアニストみたいに長く
てきれいで。爪もガラスみたいに透明で、

爪の根もとの白くなってるそこあるでし

よ？」

陽向、自分の爪を見て、

陽向「この三日月みたいなの？」

りな「そう」

太一の声「爪半月（そうはんげつ）」

りな、一瞬、沈黙し、

りな「…そこがね、真珠みたいだった」

沙織「真珠かー」

りな、照れている。

りな「（思い切って）ねえ沙織。菊池君のタイ
プってどんな人？」

沙織「いや、それは聞かないほうがいい」

陽向「え？ 彼女いるの？」

沙織「いないと思うけど…あいつは年上の芸

能人が好きだって聞いたことがある」

りな「年上？」

陽向「誰？」

沙織「…石田ゆりこ」

りな「え？」

陽向「マジ？ あの人がって何歳？」

太一の声「56歳」

りな、陽向、沙織、一瞬、沈黙する。

沙織「…あ、ピカソ」

りな「え」

沙織「ピカソ展、流星を誘ってみたらいいじ

ゃん」

りな「え、ムリだよ。ほとんど話したことな

いし」

陽向「大丈夫だよ。沙織がサポートしてくれ

るから」

沙織「任せとけ」

電車、停まる。

りな「じゃ（とそそくさと立つ）」

沙織「あ。逃げた」

りな「逃げてないから（と笑う）」

太一、電車から降りるりなの後ろ姿を
目で追う。

太一、ふと視線を感じて正面に戻す。
陽向と沙織、視線をさっと太一から逸
らす。

○太一が見上げる夜空（夜）

月が出ている。

亜希子の声「みゆ、ご飯できたー！」

太一、振り返る。

○太一の家・居間

太一の前で、亜希子、みゆ、すき焼き
を食べている。

みゆ、割った生卵から白い糸のような
ものを箸で取り除いている。

亜希子「（見て）取らなくても。それも食べれ
るのよ」

太一の声「カラザ」

みゆ「だって気持ち悪いんだもん。この糸み
たいの」

太一の声「カラザ」

亜希子「その糸みたいなの、栄養満点なんだ
よ」

太一の声「カラザ」

亜希子、みゆ、沈黙する。

亜希子「…ねえ。ピカソ展だけど。ママ、お
友達といくことになったから。もしかした
ら帰り遅くなるかもしれない」

みゆ「ふーん」

みゆ、亜希子を見る。

亜希子「…何？」

みゆ「ママ、なんかオシヤレになった」

亜希子「そう？」

みゆ「その友達って彼氏とか？」

亜希子「(慌てる)やだ。そんなんじゃないっ
て」

○同・太一の部屋

太一、じっと天井を見つめている。

太一、リモコンで電気を消す。

暗闇に灯るオレンジ色の豆電球。

太一の声「…ナツメ球」

○学校・教室（翌日・朝）

太一、席に座っている。

陰キヤの男子、やってくる。

男子「（太一を見て）おす」

太一、頷く。

男子、通り過ぎる。

×

×

×

太一の席の前で、りな、陽向、沙織が

話している。

沙織「あー、小テストダルい」

りな、世界史の教科書を見ている。

りな「問題。イギリスの正式名称は何でしょ

う？」

太一の声「グレートブリテン及び北アイルラ

ンド連合…」

りなたち、気まずそうに背を向ける。

×

×

×

教壇の教師、教科書をしまう。

教師「今日の授業はここまで」

太一の声「(被せて)…国」

りな、背伸びをする。

りな「あー、今日も疲れたー」

陽向、沙織に目配せをする。

沙織、廊下を見る。

流星の姿がある。

沙織「(叫ぶ)流星!」

りな「え?」

流星、教室に入ってくる。

流星「…何?」

沙織「りなが話があるって」

りな「(ちよっと!)」「

流星「佐藤が？」

陽向と沙織、去っていく。

りな、流星の前に取り残される。

りな「（焦る）ごめん。何でもないから。うん」

流星「…おう。ならいいけど」

流星、去ろうとする。

りな「あ！ やっぱり…」

流星「…？」

りな「（もじもじして）沙織たちがいけなくて、

菊池君を誘えってどうしてもいうから…も

しよかったらだけど、ピカソ…」

流星「ピカソ？」

りな「ピカソ展、なんだけど…」

流星「（なぜか慌てる）え、ピカソ展？」

りな「…？」

○太一が見上げるデパートの外観（数日後）

「ピカソ展開催中」の垂れ幕。

○デパート・レストラン店内

太一の前で、亜希子、気怠そうにタバコを吹かしている。

太一「(むせる)」

○同・ピカソ展

太一の前で、りなと流星が絵を眺めている。

並んで立っている二人の後ろ姿。

二人の指先が微かに触れる。

りな、恥ずかしそうにうつむく。

太一、その光景を見て涙を流す。

太一の視界が涙で塞がれる。

×

×

×

太一の視界、ぼやけている。

太一、ハンカチを取り出す。

太一、ハンカチで涙を拭く。

クリアになった視界の先で、流星と亜希子が見つめ合っている。

太一、驚いてハンカチで何度も目をこする。

が、やはり流星と亜希子の姿。

亜希子「：あの子、そろそろお手洗いから戻ってくる頃だわ」

流星「(亜希子へ)：会いたかったです。ほんとは約束通り、亜希子さんとここにきたかった」

亜希子「別にいいの。あなたは若い子が好きなのよ。私とくるより若い子ときたほうが楽しいもの」

流星「いえ、俺は亜希子さんが好きです」

亜希子「私、おばあちゃんよ」

流星「おばあちゃんじゃない。若いです」

亜希子「おばあちゃんなの。長生きした分だけ色んなものを背負ってるから」

流星「：」

亜希子、ピカソの絵を眺め、

亜希子「ねえ。ピカソの本名、知ってる？」

流星「本名？」

亜希子「ピカソの本名と同じくらい、私は色んなものを背負って生きてるの」

亜希子、流星のもとから立ち去る。
りな、戻ってくる。

太一の声「パブロ……」

○教室（数日後）

太一の声「ホセ……」

太一の視線の先、りなと流星が楽しげに話している。

○道（数日後）

太一の声「フランシスコ・デ……」

太一の視線の先、りなと流星が仲良く手を繋いで歩いている。

○教室（数日後）

太一の声「ネポムセーノ・マリーア……」

太一の視線の先、りなと流星が机を並べて弁当を食べている。

○ 繁華街（数日後・夜）

太一の声「レメデイオス・クリスピン・クリ
スピアーノ：」

太一の視線の先、亜希子と流星が腕を
組んで歩いている。

二人、ラブホテルへ入っていく。

○ 道（数日後）

太一の声「ラ・サンデイシマ・トリニダード・
ルイス：」

太一の視線の先、亜希子と流星が歩い
ている。

と、二人の前になりなが現れる。

亜希子とりな、対峙し、睨み合う。

○ 学校・教室（一ヶ月後）

太一の声「…ピカソ」

太一の席の前で陽向と沙織が話してい
る。りなの姿がない。

陽向「（心配し）りな、大丈夫かな…」

沙織「（腹を立て）流星の奴、りな泣かせたら
ぶん殴ってやるから」

○ 太一の家・居間（夕）

太一の前で、りなと亜希子がにらみ合
っている。

りな「これから流星に電話します」

亜希子「私は譲らないから」

りな「それは流星が決めることです」

亜希子「…そうね」

りな、カバンからスマホを取り出す。

りな、電話をかける。

流星の声「もしもし」

りな、スマホをスピーカーカーフオンにし、

テーブルの上に置く。

りな「…流星。どっちか選んで」

流星の声「え？」

りな「私かおばさんか」

亜希子「おばさんっていわないで」

流星の声「(慌てる)え、りな、どうということ？」

りな「そういうことだから」

流星の声「え」

亜希子「流星。あなたも男でしょ。私を取る

かこの子を取るか、今この場でハッキリさ

せてちょうだい」

流星の声「…わかりました」

りなと亜希子、息をのむ。

流星の声「俺は…」

みゆの声「ただいまー！」

みゆ、帰ってくる。

緊迫した空気に、

みゆ「(固まる)え？」

亜希子「みゆ、晩ご飯まだだから自分の部屋

にいったなさい」

みゆ「(りなを見て)誰？」

亜希子「…いいから部屋にいきなさい」

りな「(みゆへ)私はあなたの母親に彼氏を取

られました。その人はまだ16歳です」

亜希子「何いってんの。そっちが取ってきた

んでしょ」

りな「こつちが先です」

亜希子「こつちよ」

みゆ「(驚いて)…ちよ…ママ、ほんとなの？」

亜希子「本当だとしたら何？ ママが恋したらダメなの？」

みゆ「…」

亜希子「これまで女手一つで必死にあんたを育ててきたの。みゆはずっとママに子育てしてろっていうの？ ママが恋しちゃダメなの？」

みゆ「そんなこといってない。Isの彼氏って私と〇歳しか変わらないじゃん！」

みゆ、亜希子へ詰め寄る。

みゆ「痛っ！」

みゆ、しゃがみ込んで床に落ちていた靴下の金具を拾う。

みゆ「なんでこんなところに靴下の金具が…」

太一の声「ソクパス」

流星の声「ん？」

みゆ「…（亜希子へ）ロリコン！ ママ、ロリコンじゃん！」

亜希子「ロリコンじゃない。シヨタコンです。

ママシヨタコンですけど何か？（と開き直る）」

みゆ「最低！」

みゆ、去っていく。

亜希子「（流星へ）さあ、答えを聞かせて」

流星の声「…りなのことも亜希子さんのこと

も好きだという気持ちは本当です」

りな、亜希子「…」

流星の声「それはウソじゃない。でもごめん。

実は今他に付き合ってる人がいる」

りな、亜希子「…？」

流星の声「最近美容院で知り合って、大学生の人なんだけど、俺、その人と真剣に付き合いたいと思ってる」

りな、亜希子「…」

流星の声「だから、二人ともゴメン…俺とは別れてほしい」

電話、切れる。

亜希子、絶句する。

りな、カバンを手にして飛び出す。

○公園

辺りは薄暗くなっている。

太一の視線の先、りながベンチで泣き

ながら電話している。

りな「(過呼吸になりながら)フラれた…うん、

うん…最低だよ…大丈夫…うん…ありがとう

う…私決めた…いつか流星を絶対に見返す

…今よりもっとかわいくなって…いっぱい

恋して…流星よりいい男を絶対見つける…」

りな、電話を切る。

りな、カバンからピカソ展のパンフレ

ットを取り出し、クシヤクシヤにして

投げ捨てる。

りな、ベンチから立ち上がる。

凜とした顔で太一のほうへ歩き出す。

太一、そっとハンカチを差し出す。

りな、一顧だにせず。

りな、去っていく。

太一、ベンチへと歩き出す。

地面に落ちているクシヤクシヤになっ

たピカソ展のパンフレット。

太一、パンフレットを見つめる。

ピカソの「泣く女」の絵が書かれてい
る。

太一の声「パブロ……」

○道（1年後）

太一の声「ホセ・フランシスコ……」

太一の視線の先、りなが新しい彼氏と
手を繋いで仲良く歩いている。

○大学・食堂（3年後）

太一の声「パウラ……」

太一の視線の先、カップルが仲良く食
べている。

○会社・給湯室（9年後・夜）

太一の声「ネポムセーノ…」

太一の視線の先、カップルがこっそり
いちちゃついている。

○道（10年後）

太一の声「デ…」

太一の視線の先、夫婦がベビーカーを
引いて歩いている。

○道（15年後・夜）

太一の声「レメディオス・クリスピン・クリ
スピアーノ…」

太一の視線の先、中年カップルが路上
キスをしている。

○道（10年後）

太一の声「ラ…」

太一の視線の先、熟年夫婦が手を繋い
で仲良く歩いている。

○公園（10年後）

太一の声「トリニダード・ルイス…」

太一の視線の先、老夫婦がベンチで仲良く寄り添っている。

○病院・廊下（10年後）

太一（80）、廊下を歩いている。

太一、トイレに入る。

太一、ゆっくりと鏡の前に立つ。

皺だらけの太一（80）の顔が、一瞬、鏡に映し出されて…

太一の声「…ピカソ」

（おわり）